日本分析化学会第56年会

1　はじめに

日本分析化学会第56年会は，2007年9月19日（水）から21日（金）の3日間にわたり，徳島大学常三島キャンパスにて開催された。会場には6階建ての講義棟を利用して，口頭講演，ポスター講演，学会賞授賞式，機器展示会を実施した。

年会が四国に渡ったのは初めてであり，また講演件数の多い名古屋，大阪など大都市での年会のあとを引き継いだ格好となった徳島年会実行委員会は，講演件数の確保が大いなるプレッシャーとなったが，最終的には講演総数769件（研究懇談会講演11件，受賞講演11件，シンポジウム講演10件を含む），参加登録者1270名と，なんとか年会主催の面目を保つことができた。二百二十日近辺の台風シーズン真っ盛りでもあり，徳島大学での同時期に開催された過去の他学会などでは台風による混乱があったことから，実行委員会としても台風襲来を大変心配したが，参加者の日頃の行いの良さと研究発表に対する意気込みが反映されてか，3日間受付に氷柱を用意するほどの暑い晴天に恵まれた。

2　講　　演

講演は講義棟の同一会場内において14会場を用意して実施された。会場は講義棟の講義室の中で広いものを選定し，最高で120席，最低でも60席以上あり，プロジェクター備え付けの講義室により実施した。会期が始まってみると，60席の部屋では立ち見の聴講者であふれるほどの講演も見られた。講演分類は大阪大会を引き継いだ形で30分類とした。講演区分に関してはほとんど登録のない分類もあり，最新の分析化学の研究分野に対応した区分を作る必要を感じた。講演分類ごとの発表件数や聴講者数などについては，表1にまとめて示す。本年会では，名古屋や大阪で実施していた口頭講演の優秀発表賞の表彰に関しては実施しなかった。現状の中国四国支部の実行委員体制では，各分野の選考委員を十分確保できないこと，選考委員への負担が過重となること，優秀発表の選定の客観性・公平性の確保ができないことを総合的に判断して決定した。これまでの名古屋，大阪年会での流れを断つ形となり，大変申し訳なく思っている。ポスターのみ表彰する現行のスタイルも，学会講演者（一般口頭講演，一般ポスター講演）からすると公平感に欠けるものであり，口頭・一般ポスター講演者の処遇は今後の大変重い課題であるとも言える。口頭講演の認定証（Certification）を実行委員長名で交付するのも手かもしれない。

本年会でもパワーポイントによる口頭発表を原則とした。これまでの年会からの変更点は，自らパワーポイントのファイルを会場備え付けのパソコン（PC）に入力することである。従来は，2台のPCを使用して，USBメモリを会場受付に渡して，学会側がインストールするものであった。今回は，1台のPCを実行委員会側で用意し，入力時間の間にインストールする形をとった。入力時間のために，午前（10：30～45）に15分，午後（14：30～45）に15分の休憩を挟むこととした。混乱も予想されたが，パワーポイントでの講演が既にかなりの普及を見せていることもあり，ほとんど混乱なく実施できた。しかし，いくつかの問題が見られた。まず，① 講演者が入力すべき時間に来場しない，② スライドが思うように投影しないことである。① に対しては，自身の講演直前にインストールすることで対処した。しかし，講演時間の遅延を招くため，今後とも事前入力の徹底をアナウンスしていく必要がある。② に関しては，本年会直前にWindows XPからVistaへのOS変更があり，大変危惧された点である。また，実行委員会側から用意したPCはいずれもパワーポイントのバージョンを統一し，パワーポイント2007対応ファイルを入れていたにもかか

写真1　年会受付会場（徳島大学講義棟）

表1　第56年会分類別講演申込および聴講者数一覧表

分　類	一般講演件数	最大聴講者数	一般ポスター	若手ポスター	テクノレビュー
01：原子スペクトル分析	22	90	11		
02：分子スペクトル分析	25	60	9	7	1
03：レーザー分光分析	9	50	6		
04：X線分析･電子分光分析	16	50	8	3	
05：放射化学分析				1	
06：NMR，ESR，磁気分析	3	40	1		
07：熱分析					
08：センサー	12	50	11	2	
09：電気化学分析	38	70	10	3	
10：質量分析	12	50	14	1	1
11：有機微量分析(元素分析を含む)		60	2		1
12：FIA	17	70	6	2	
13：LC	23	70	26		
14：GC	6	60	2		1
15：電気泳動分析	16	50	6	5	
16：マイクロ分析化学	18	60	2	4	
17：分離・分析試薬の設計	12	60	8	1	
18：抽出・イオン交換	17	60	7	4	
19：サンプリング，前処理	1	60	6	4	1
20：分析化学反応･速度論的分析	3	50	1		
21：標準試料	4	90	7		
22：基礎理論・基礎データ	2	60		2	
23：環境･地球化学関連分析A	38	80	22	6	
24：環境･地球化学関連分析B	14	60	16	3	
25：生体関連･医薬･法科学分析	27	100	16		
26：バイオ分析	33	60	14	20	
27：無機・金属材料分析	7	50	5		2
28：有機・高分子材料分析	8	40	7		
29：界面・微粒子分析化学	37	110	6	5	
30：その他	5	60	3	1	
合　計	425		232	74	7

写真 2　ポスター会場

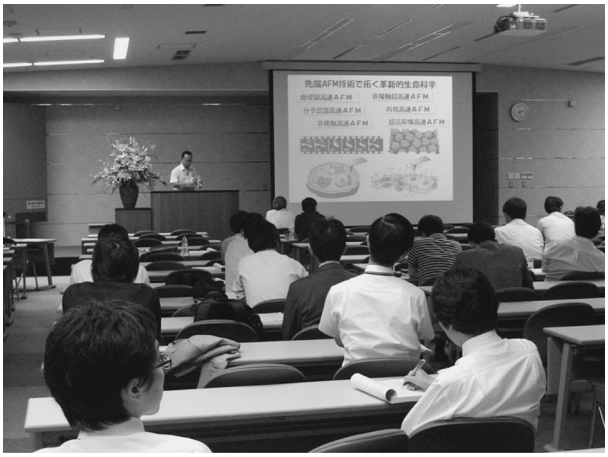

写真 3　特別シンポジウム講演

わらず，数件の発表で動画ファイルを中心に不具合を生じた。この場合には，講演者自身の PC を講演に使用することで対応した。この問題に関しては，非常にファイルサイズの大きい動画を投影する場合には，自身の PC を使用するなど柔軟な対応が実行委員会サイドに求められると思われる。今回の年会のように，午前・午後に休憩時間をとる講演プログラムのスタイルでは，講演時間の遅延に対しては休憩時間の短縮により対応できるため，PC の入れ替えなどにはそれほど神経質になることはないようにも思われた。

ポスター発表は 3 部屋に分けて，企業展示を併設して行われた。徳島大学に特有（?）の横長（90×180 cm）の山形パネルを利用したポスタースタイルにて実施した。この横長スタイルは斬新すぎたのか，実行委員会に事前に多くの問い合わせがあった。この横長ポスタースタイルは，ポスター講演者間の距離が離れるため，ゆったりとスペースが使えることから大好評であった。各セッションとも，常時 100 名ほどの参加者が来場し，活発な議論が行われていた。

3　若 手 企 画

若手ポスター講演（1 日目，14：00～17：00）〔若手企画総合責任者：早川慎二郎（広大院工）〕

本シンポジウムの趣旨は，分析化学の将来を担う若手の研究者に自分の研究と社会ニーズとの関係をアピールしていただくとともに，学会員に限定しない公開討論の場を一定時間設けることでシーズを求める人が集まる場，共同研究の芽が生まれる場を提供することにあった。当初，会場の都合上 60 件を上限として募集したが，思いのほか件数が伸び，最終的には 75 件の講演が集まった。14 時 30 分からの通常のコアタイムから 16 時以降の一般公開と 2 時間を超える講演であったが，一般公開には 70 名を越える人数が集まり，最後まで質疑応答を繰り広げるなど熱気みなぎる会場であった。本講演では若手ポスター賞を選考した。選考委員には各支部推薦者 1 名ずつ計 7 名，実行委員会推薦者 5 名を任命し，選考にあたった。5 件選定する予定であったが，甲乙付けがたい優秀なポスター発表があり，特例として 6 件のポスターを優秀賞として表彰した。表彰者 6 名中 5 名が女性であった。これら若手女性分析化学者に対して，本ポスター賞の受賞を契機としてますますの研鑽と発展を期待したい。また，今後の男性若手研究者の発奮が望まれる。受賞者とテーマは以下のとおりである。

1.「新規ストップトフロー法によるバナジウムの自動分析」○久野真紗美・上田　実・手嶋紀雄・酒井忠雄（愛知工大）
2.「MALDI−MS による抗菌活性菌 Rhodococcus erythropolis 分子系統解析」○寺本華奈江・佐藤浩昭・孫　麗偉・鳥村政基・田尾博明・北川　航・田村具博（産総研環境管理・産総研ゲノムファクトリー）
3.「バイオ分析を目的とした 700 nm を超える新規高輝度近赤外蛍光色素の開発」○中村有希・梅澤啓太郎・牧野　弘・Citterio Daniel・鈴木孝治（慶大理工・KAST・JST−CREST）
4.「バイオ分析を目的としたルシフェリン型新規化学発光色素の開発」○関屋真喜・梅澤啓太郎・佐藤朱美・鈴木孝治（慶大理工・KAST・JST−CREST）
5.「脱塩基部位形成とナフチリジン誘導体を併用する一塩基多型（SNPs）蛍光検出」○佐藤雄介・清野丈博・市橋俊希・西澤精一・寺前紀夫（東北大院理・JST−CREST）
6.「無機イオンの高感度分析を目指した量子ドットの作製」○甲斐美奈子・油屋就介・北川文彦・大塚浩二（京大院工）

なお，受賞者にはミキサーでの挨拶と後日賞状と副賞（徳島ラーメン）が送られた。

4　特別シンポジウム

「メタロミクス：生体金属科学の新展開」（1 日目，13：00～16：00）〔企画責任者：原口紘炁（国際環境研究協会）〕
「ナノ分析・計測化学が変えるバイオ研究」（3 日目，13：00～16：20）〔企画責任者：馬場嘉信（名大院工）〕

特別シンポジウムとして，二つの大テーマを掲げて，講義棟創成学習スタジオにて講演が行われた。初日には，本会会長でもある原口紘炁氏をオーガナイザーとする前者のシンポジウムが実施された。メタロミクスは原口氏が 2004 年に提唱した生体金属の機能解明を主眼とする科学に対する概念であり，「生体金属支援機能科学（biometal−assisted function science）」として，世界的にも認知されつつある新しい研究分野である。金属の生体内での作用機序を解明するためには，金属が関連する他の学問分野（健康化学，環境化学，毒性学，栄養学，農学，獣医学，食品化学など）との協調が不可欠であり，本シンポジウムは多様な背景・手法を持つ研究者による講演と聴講者による質疑応答がなされた。「メタロミクスと分析化学の役割」原口紘炁氏，「Se 濃度の異なる飼料で飼育したマウスの Se 体内分布とその経時変化」古田直紀氏（中大理工），「生体成分のセンシングとイメージング技術」鈴木孝治氏（慶大理工），「微量元素の生体内分布と疾病研究への応用」篠原厚子氏（清泉女大），「バナジウムやジンク錯体による糖尿病およびメタボリックシンドロームの治療は可能か?」桜井　弘氏（鈴鹿医療科学大東洋医研）の 5 氏により講演が行われ，100 名を越える参加者が聴講する中，活発な議論が交わされた。

3 日目には馬場嘉信氏をオーガナイザーとして後者のシンポジウムが行われた。2006 年大阪年会からも「界面・微粒子」が分析化学会の講演分類として登録されるようになっており，分析化学の学問分野として完全に定着している状況である。また，日本政府の長期戦略の中にある「イノベーション 25」の

戦略重点科学技術として，ナノテクノロジーの活用と分子イメージング技術の高度化などが謳われている。このようにナノ分析・計測科学に対する関心が沸騰点に達しつつある状況にあり，時宜に適った企画といえる。講演は「ナノ分析・計測化学が変えるバイオ研究」馬場嘉信氏（名大院工），「タンパク質1分子のリアルタイムAFMイメージング」安藤敏夫氏（金沢大院自然科学），「1分子酵素活性・1分子遺伝子発現計測」野地博行氏（阪大産業科学研），「遺伝子の細胞内トラフィッキング計測」原島秀吉氏（北大院薬），「生命機能を探るナノバイオセンサーの創製」浜地　格氏（京大院工）の5名により行われた。最終日にもかかわらず，100名を越える聴講者が聞き入る盛況となった。

5　付設展示会

〔企画責任者：本仲純子（徳大院ソシオテクノ）〕

本年会では，付設展示会として機器展示とカタログ展示を行った。機器展示は，9月初めに開催された分析展と開催時期が近いために，申込件数が少ないのではないかと心配したが，関係各位の努力により23社の申込があった。機器展示会場は，展示ブースへの来場者を増やすためにポスター会場内に設置した。また，来場者への便宜を図るため，お茶とお菓子の提供を行った。非常に多数の参加者があり，出展会社および参加者にはおおむね好評であった。また，カタログ展示は10社の参加があり，ポスター・展示3会場それぞれの部屋前にテーブルを準備して展示した。

6　表 彰 式

学会賞等各賞の授賞式は，2日目の13時15分から講義棟創成学習スタジオで行われた。原口会長の挨拶に引き続き，学会賞，学会功労賞，技術功績賞および有功賞の各審査委員長から，それぞれの賞の審査経過並びに受賞者と業績が説明された後，会長から賞状と副賞が贈呈された。その後，14時45分より受賞会場にて，木村恵一，鈴木孝治，中島憲一郎の3氏による学会賞受賞記念講演が行われた。なお，技術功績賞を受賞された高橋純一氏，上本道久氏，平田静子氏および奨励賞を受賞された稲垣和三氏，上野貢生氏，片山建二氏，佐藤守俊氏，永谷広久氏の5名の受賞講演は，関連する一般講演会場で行われた。恒例となっている有功賞受賞者の記念撮影は，授賞式の後，式典会場の裏のロビーで行われた。

7　テクノレビューおよび研究懇談会講演

テクノレビューは，分析機器・装置・器具，分析技術及び分析化学関連の情報について講演を通じて会員に発信していただく企画である。テクノレビュー講演は，一般口頭発表と異なり30分の持ち時間が与えられているため，一般の講演より詳細に研究内容と装置概要を聞くことができる。その点でも，企業と参加者の双方にとって非常に意義深いものである。本年会では，このような趣旨に賛同いただいた企業から7件の申込・講演があった。一方，研究懇談会講演として，11懇談会で14件の講演が行われた。この講演会は，各研究懇談会が演者と座長を選定するため，焦点の絞られた研究発表となり，活発な討論をはじめとして実のある講演会となったと思われる。

8　ミ キ サ ー

〔総合司会・企画：高柳俊夫（岡山大理）〕

ミキサーは，1日目18時より徳島大学工業会館で開催され，150名の参加者があった。開会の挨拶などに続き，若手ポスター賞の表彰が行われた後，本仲純子実行委員長の発声で乾杯を行い，開宴した。若手向きのボリュームのある料理に加えて，徳島名物のフィッシュカツが振る舞われた。また，実行委員会の意向により，ビール，チューハイ，すだち酒等を潤沢な（過ぎる）ほど用意した。なお，若手ポスター賞の受賞者各氏から，ユーモアあふれる答辞がなされた。また，アカペラグループによる合唱が行われて，大いに盛り上がった。

写真4　懇親会での阿波踊り

9　懇 親 会

〔総合司会・企画：田中秀治（徳大院ヘルスバイオ）〕

2日目18時より，ホテルクレメント徳島にて開催された。懇親会は，本仲年会実行委員長，原口本会会長の歓迎の挨拶から始まり，来賓としてお招きした飯泉嘉門徳島県知事，徳島大学の青野敏博学長，矢野米雄ソシオテクノサイエンス研究部長からそれぞれご挨拶をいただいた。その後，樽酒の鏡開きが行われ，宴となった。しばし歓談の後，城北高校の民芸部による阿波人形浄瑠璃が行われた。その後，娯茶平（総勢50名）による阿波踊りが行われ，参加者含めて会場全体で輪になって踊りがくり広げられた。次期分析化学討論会開催地，中部支部長の竹内豊英氏（岐阜大学），および次期年会開催地，福岡大学の脇田久伸氏から両集会へのお招きの挨拶があり，最後に廣川健中国四国支部長が懇親会のお開きを宣し，会を終了した。

10　お わ り に

本年会の開催が決定した当初，我々実行委員会として“身の丈に合った年会”を学会開催の基本コンセプトとした実施計画を立案した。中国四国支部は他の支部に比べて，拠点となる分析化学教室が分散していること，企業・官公庁などが少なく絶対的マンパワーの不足が懸念されたからである。また，主要幹線道・鉄道・航路から離れていることから，参加者の確保も大きな問題であった。そのため，学会の基本線である口頭講演，ポスター講演，特別シンポジウムの円滑な実施と，参加者の親睦の中心となるミキサー・懇親会の開催に対し，限られた資源（人員，場所）を注入するとのスタンスで学会の計画を策定した。

本第56年会は，約60名の実行委員の方々が各担当分野でご努力していただいたおかげで，大きなトラブルもなく終了させることができた。本部事務局の方々には，懇切丁寧に対応いただいた。さらに，徳島大学工学部化学応用工学科の教職員・学生にも本年会に対する支援を依頼した。3日間にわたり，15名を越える教職員と60名を越える学生アルバイトに会場担当として支援していただいた。教職員においては1～4日間も支援していただき，全く感謝に堪えない。大学内を隅々まで知っておられる教職員と学生アルバイトの支援は本年会の円滑な進行に，極めて重要かつ効果的であったことを強調しておきたい。我々の所属している学科では，これまでも全国規模の学会を主催する上での相互扶助（化学工学会・触媒討論会など主催時）が行われてきた。大学によって事情は異なり即座の実施は難しい面はあると思われるが，このような相互扶助関係を醸成しておくことは地方大学・小規模大学における全国大会規模の学会運営の実施において重要といえる。

最後に，協賛各企業・団体，徳島大学をはじめ，年会運営をお手伝いいただいた実行委員・日本分析化学会本部・徳島大学工学部化学応用工学科教職員・約60名のアルバイト学生の皆様・実行委員会事務局を支えていただいた篠原典子さんに，本仲純子実行委員長に代わり厚く感謝申し上げます。

〔第56年会実行委員会庶務幹事　薮谷智規〕